書評 2「アカデミック・スキル」か，それとも「学問への態度」か？

—— Justin Aukema, *Essential Academic Skills for University Research*, 2023 の刊行に寄せて ——

中　村　健　吾

1.「ハウツー本」の隆盛と大学教育の変質

大阪市立大学生活協同組合の書籍部で，それまでは配架の主流を占めていた専門書の量が相当に減り，資格の取得や試験への対策を説くいわゆる「ハウツー本（how to-book）」が目立つようになったのは，たしか 20 世紀の終わり頃だったと記憶している。そして，その後まもなく，大学の演習科目において学生諸君に「プレゼンテーション」の「スキル」を身につけてもらうための授業内容がどこからともなく求められてきたように思う。そうした要求はおそらく，主張内容の出典や根拠をしつこく求めるはずのアカデミズムからというよりは，マイクロソフト社のパワーポイントを用いて宣伝内容をわかりやすく効率的に発信することを至上命題とするビジネス界の利害関心に発するものだったのであろうと，評者は勝手に推測している。21 世紀の大学生は，学問に接することよりも就職に役立つ「スキル」を「身につける」ことを，1 年生のときから暗黙裡に求められてきた。しかしながら，パワーポイントは論者の主張の細部とニュアンスと論拠をそぎ落とす媒体でもあることを，学生以前に先ずは教員が自覚するべきだ。

とはいえ，ほとんど生理的に近い嫌悪感を評者自身が覚えるパワーポイントなどというソフトウェアの活用を，演習型の授業において評者自身が学生に求めてきたという歴史的経緯は否定できない。そしてこれにともない，授業において追究する課題の内実（「事柄そのもの」：die Sache selbst）を顧みないまま，そうした内実にそぐわない探求方法や発表手法のみを洗練させるという「教育」が，—— それへの評者自身の加担をともないつつ —— 横行してきたように思う。「スキル」が「事柄そのもの」から乖離して自立し，宣伝やプロパガンダを目的とするような〈技術〉になってしまうのなら，「プレゼンテーション・スキル」なるものは「シロ」を「クロ」だと言いくるめるだけの技法に堕す。

2. 大学生にとっての本書の難しさ

Essential Academic Skills for University Research と題された本書の Part Ⅰ には，「研究

のプロセス」という見出しが付されている。そこでは，授業において学生が探究することになる課題の選定から始まり，他の学生の面前での最終的なプレゼンテーションへ至るまでの数多くの段階における著者の学生へのアドバイスが，12の諸章に分けて綴られている。

学生に対する著者の本書でのアドバイスは懇切丁寧であると，評者は感じた。とはいえ，本書に記されている学習・研究手法を大学1年生が実際に我が物にできるのかという点について，評者は不安を覚えた。大学1年生向けの演習型授業において，英語を授業での使用言語としながら，教科書での要求水準がここまで高い授業が果たして実施可能なのかどうか，評者には確信が持てなかったのだ。なぜなら，Part Ⅰの12の諸章で学生に対して推奨されていることの中には，評者自身にとっても実行困難な要求が含まれているからである。

実際，参考文献の書誌情報の提示の仕方が大学の1年生にとって不慣れなことであるのはやむを得ないにしても，自らの独自の主張を序文や結論において明瞭に述べることを勧める著者の以下の勧告は，評者のような年輩の研究者にとっても耳に痛く響くところがある：

「自分が論じていることを明瞭に言明するのを忘れたり怠ったりするのは，アカデミズムにおける多くの著者たちですら犯す平凡な誤りのひとつである」(p. 84)。

ところが，本書の著者であるアウケマ氏によれば，同氏が2022年度に大阪公立大学の1年生向け授業科目として担当し，本書を教科書として用いた「初年次ゼミナール」は成功裏に終わったというから，驚くほかはない。もしかしたら評者は授業において学生諸君の潜在力を最初から過小評価し，彼・彼女らの力を十分に引き出していないのかもしれないと，あらためて反省した次第である。

3. 本書に読み応えがある理由

では，アウケマ氏が大学の1年生向けに著した英語によるこの教科書は，単なる「ハウツー本」を超えるような内容を含んでいるのだろうか？

この問いに対する評者の答えをあらかじめ述べるなら，本書には「ハウツー本」を超える要素がいくつもある。しかも，そうした要素は本書においては，どちらかといえば研究の「スキル」または「テクニック」を中心に解説しているPart Ⅰにおいてすら見いだされるのである。

この教科書が単なる「ハウツー本」でない第1の理由は，20世紀半ばのアジア・太平洋戦争にかかわる日本の戦争体験や戦跡に関するアウケマ氏自身のこれまでの研究を，本書における見本・手本として取り上げていることにある。自分の研究の手の内をさらけ出すかのような本書のこの特色は，これを教科書として用いた授業に参加する学生にとっても，自分自身が調査・研究へと立ち向かううえで大いなる刺激となるはずである。とくに，Chapter Eightで紹介されている日中戦争にかかわる一連の歴史的な写真と絵，ならびにそれらに関するアウケマ氏の分析は，本書が教科書であることを忘れさせるような魅力を読者に対して放っている。

本書に読み応えを付与し，しかもいわゆる「アカデミック・スキル」なるものを伝授しようとする凡百の他書から本書を区別している第 2 の理由は，論文またはプレゼンテーション資料作成の「スキル」を述べている Part Ⅰに続いて，「科学」や「ニュース」や「理論」に対していかなる態度を採るべきかを語る Part Ⅱが設けられていることにある。

この Part Ⅱが設けられているがゆえに本書は，経済的・政治的・社会的な〈利害関心〉のせいで〈バイアス〉の生じることが避けられないわれわれの〈認識〉を〈反省〉によってできるかぎり補正するという，「ハウツー本」がけっして説くことのない学習・研究態度に触れることのできる教科書となっている。すなわち，研究の対象となっている「事柄そのもの」の性質から乖離した〈方法〉や〈スキル〉を対象に無理やり適用しようとする態度から距離をとることの大切さを，学生は本書から学ぶことができるかもしれないのだ。「科学」とは専門家が独占する固定した静態的な認識の束ではなく，所与の情報・主張・理論の妥当性を「合理的に疑う」ことから始まる終わりなき過程なのだという本書の命題（p. 129）に，評者は共感せざるをえないし，「科学」へのそうした構え方を評者自身も学生諸君に求めていきたいと思う。

4.「スキル」か，それとも「学問への態度」か？

本書に対する上記のような評者の共鳴にもかかわらず，Part Ⅱの見出しが Critical Thinking Skills となっているのは評者には解せない。大学教育にかかわる Critical Thinking などという，技術的な臭いを漂わせるいかがわしい概念を誰がいつ提唱し，それが世界中にいかにして普及するようになったのかを評者は寡聞にして知らないし，それについて調べる気にもなれない。

かつまた，Part Ⅱの内容全体に対して〈スキル〉という見出し語を充てることに，評者はどうしても違和感を覚えてしまう。Part Ⅱは，調査・研究の〈スキル〉のみを語ってはいないと評者は思う。それはむしろ主として，大学の 1 年生が触れ始めることになる学問への基本的な接し方と構え方（つまりは態度）を説いたものだと考えられるのである。

そして，Part Ⅱで説かれていることを理解するだけでなく実践することは，学士課程の 4 年生はおろか大学院生にとっても容易ではないだろう。Chapter Fourteen における「ニュース」と「ジャーナリズム」の区別に関するアウケマ氏の主張は評者にとっても教えられるところ大であったが，同章の後半に出てくる認識の「客観性」問題に関する叙述 —— その結論は「本当に客観的であることなど誰にもできはしない」というきわめて正当な命題である（p. 136）—— は，あのマックス・ヴェーバーの論文「社会科学的・社会政策的認識の『客観性』について」（1904 年）を彷彿とさせるほど，学生諸君にとっては難しい。そして，解説書ではなく「ヘーゲル，カント，マルクス，ニーチェ」らによる哲学や社会科学の古典そのものを読めという Chapter Fifteen における推奨（p. 146）も，—— 評者自身が日ごろから学生諸君に説い

ていることではあるけれども ―― 教員の号令だけで終わってしまいそうな気もする。

とはいえ，評者による上記のような心配や杞憂をよそにして本書は，批判的な歴史学者が学生諸君を意欲的な歴史研究へ誘おうと試みた，緊張感あふれる教科書であるには違いない。